

## 児童生徒の成長・発達をめざした自立活動

### — 関西医科大学総合医療センター分教室の取組み —

関西医科大学総合医療センター分教室

#### 1 関西医科大学総合医療センター分教室の自立活動について

関西医科大学総合医療センター分教室は年間 80～90 名の在籍があり、常時 7～10 名程度の児童生徒が学習をしている。小学生より中学生が多く在籍している。

入院期間は一か月程度の児童生徒が多く、そのため児童生徒の入れ替わりが多い。児童生徒の多くは起立性調節障害、摂食障害という診断で入院している。起立性調節障害や摂食障害の児童生徒は年々増加傾向にある。その多くは不登校を伴い、学習空白が大きかったり自己肯定感が低く学校での友達付き合いが苦手であったりする。そのため児童生徒は入院中の目標として「生活のリズムを整えたい」「学校に登校できるようになりたい」「学び直したい」という思いを持ち、本分教室の学習活動に取り組んでいる。

児童生徒の課題を解決し願いに応えるために自立活動の時間を設けている。特別支援学校の学習指導要領の目的の 6 区分のうち特に「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」を中心に取り組んできた。

本分教室における自立活動の具体的な目標は次の通りである。

- ・分教室での様々な活動を通して、集団に慣れる
- ・集団活動のルールやマナーを知る
- ・これからの生活や社会の中で、できることが増えるような経験を積む

入院するまで不登校の経験が長く、別室での登校をしてきた児童生徒に対して、本分教室に毎日登校することができた経験を退院後地域校への復学にいかしていくことが重要である。本稿では自立活動の具体的な取組みについて紹介する。

#### 2 具体的な取組み

45 分間の自立活動の時間内に終わることができる活動について紹介をする。

##### (1) カードゲーム

(自立活動の項目：心理的な安定 人間関係の育成 コミュニケーション)

トランプや UNO、坊主めくり（百人一首）などは小学校低学年の児童でも慣れ親しんでおり、手軽に遊ぶことができるゲームである。小学校低学年の児童と中学生が自立活動の時間に一緒に楽しむことができ、ゲームを行うことでコミュニケーションが生まれ仲間づくりの一助となった。

児童生徒が初対面の時などは教員もゲームの輪に入ることで、入院間もない児童生徒同士が知り合うための支援にもなった。児童生徒が安心して入院生活を送るためにもこれらの活動は大いに役立った。児童生徒の関係が深まっていけば、UNO のような推理したり勝ち筋を見つけたりする、考えるゲームを随時取り入れていくことにより、入院中の友達との関係がより親密になっていく。

##### (2) ボードゲーム

(自立活動の項目：心理的な安定 人間関係の育成 コミュニケーション)

自立活動の時間では将棋や、オセロ、マンカラなどのボードゲームも行った。カードゲ

## I 実践報告

ーム同様、児童生徒同士がコミュニケーションを図るきっかけづくりとなった。対面で一つの盤を囲むゲームを行うことにより、ルールを教えあうなどの会話が生まれゲームを通してマナーも学ぶことにつながった。児童生徒が親しくなることで、入院時の不安やストレスが解消されることになった。

児童生徒は入院を決意しながらも病院での生活に不安を抱いたり、家族から離れて一人入院することに一抹の寂しさを感じたりする。この時分教室での小集団での取り組みは不安や寂しさを取り除くために有効である。また、自分のことを語ったり相手の意見に耳を傾けたりするなど協調性を養うための貴重な機会となっており、復学に向けての意欲を生むことにもなっている。

### (3) ホスピタルガーデンの散策

(自立活動の項目：健康の保持 身体の動き コミュニケーション)

主治医の指導と協力のもと、雨天や猛暑厳冬期をのぞいて午前中にホスピタルガーデンへ散策を行っている。1時間目と2時間目の休憩時間に行くことが多く、できるだけ決まった時間に散策するようにしている。入院中の児童生徒にとっては、外気に触れ日光を浴びることで生活リズムと睡眠リズムが是正される。またビタミンDは日光に浴びることによって生成されるため散策することは生きる上でとても重要である。血流がよくなり心身のリラクゼーションにも有効である。本分教室で学習している児童生徒の多くは不登校を経験しており外出する機会が少ない。四季の変化や雲の流れに興味を持つようになった児童生徒もお外気に触れることを楽しんでいる。散策中、児童生徒の心が軽くなり何気ないことを私たちに語り掛けることが多く心理的な安定には有効な活動である。

## 3 自立活動での活動の成果について

自立活動を通して、児童生徒の成長の成果は次の通りである。

- ・自分たちが主体的に活動をするという意識を持つことができた。  
これまで周囲を気にして「これをしたい」という自分の意思で「選択する」機会の少ない児童生徒がこのゲームをしたいなど「選択する」「伝える」経験を積む機会となった。自分がどのような活動なら参加できるのか、教員と相談しながら参加する方法について考えることができた。
- ・「自分がしたいこと」「自分が知っていること」と友達が「したいこと」「知っていること」が異なる中で、折り合いをつけて同じ活動を行い楽しむ力が身につけてきた。
- ・「自分の調子に合わせて活動する」「無理をしない」「みんなが楽しむためにはどうしたらよいか」自らの態度や言葉遣いを振り返ることができた。
- ・わからないことや困ったときには、先生や友達と相談したりする手立てを身につけることができた。
- ・先生の見守りの中、安心してコミュニケーションを図ることができた。
- ・ゲームにおいて負けがこんできた友達に対しては、応援したりエールを送る姿が見られ、思いやりや気遣いが生まれた。
- ・教科の時間には見せない顔が見られ、児童生徒同士の深いつながりが生まれるきっかけとなった。
- ・45分間の自立活動の時間内に活動を終える、活動の途中でも気持ちを切り替えるという力を身につけることができた。

## I 実践報告

### 4 自立活動と各教科の密接な関連について

自立活動はその時間だけで行えばよいものではなく、教育活動全体を通して自立活動の視点を持ちながら授業を行っていくことが求められる。

国語や算数などの授業で「できた」「わかった」ことの喜び、体育の時間でゲームをしたり体を動かした頑張り、音楽の授業で合唱をしたり合奏をした経験、美術の時間にみんなで作った作品を作り上げた体験、など取組み全体を通して「心理的な安定」が図られた。また、授業の中で自分の意見を言ったり友達の意見を聞いたりすることで「コミュニケーション」や「人間関係の形成」が図られた。

支援学校の教育活動だからこそ、自立活動の視点を大切にしながら授業を行っていく必要がある。

### 5 最後に

本分教室で学んでいる児童生徒は自立活動を通して友達と関わる中で育っていく。同じ病気、症状がある児童生徒と一緒に学ぶことはお互いを分かり合えるきっかけとなっている。苦手な学習にチャレンジする友達の姿を見たり本分教室で地域校の試験を受ける友達の姿を見て「自分も試験を受けてみようかな」と教員に伝える生徒もいる。退院時「もう少し入院して勉強したい」という児童生徒もいた。

本分教室で学んだ経験が地域校へ復学するための第一歩となり、自信につなげてほしいと願っている。

#### 参考文献

- 「現代の子どもたちと起立性調節障害」(チャイルドヘルス 26) 診断と治療社 2023 年
- 「新型コロナウイルス感染症下の学校と子ども」教育学の研究と実践 2021 年
- 「COVID-19 感染流行下における起立性調節障害患者の問題点と当院での取り組み」日農医誌, 71 号 大川優子・阿部義一・鈴木正義 2021 年
- 「コロナ禍で増える摂食障害」TBS 報道特集 2023 年 5 月 6 日放送